

教師研修の課題

小山典勇

はじめに（教化研究所から智山伝法院へ）

智山教化研究所は宗団の研究機関としてその責務を果たしてきたが、外因としては生涯教育・生涯学習などの、どの年代でも、いつからでも学べる機会の拡充という時代の趨勢によるもの、また内因としてはそれにもまして社会の問題に対応できる教学の振興、それに伴う人材の養成を旗印に、組織、機構を改組し、昭和六十二年四月より新たに智山伝法院として発足した。

ここに智山伝法院は研究機関であるとともに、教育・研修機関としての新しい任務を負うことになった。

研究課題は研究所時代の「教化推進の課題」から、宮坂有勝院長の指導の下に「教学の現代化」が提示された。つまり「社会の問題にいかに対応していくか」について、自己の思想的基盤から根本的に問い直しを迫るものと言える。

伝統教学の研究の視点として、先人の研究成果を注釈し、あるいはその時代性に反映して解釈、紹介、そして批判していく立場があろう。また、我々の生きるという営みから発生する問題に伝統教学はいかに答えるか、先人はどう取り組んだか、そこから学ぶべきものがあるのではないか、このような視点も必要であると考える。

筆者は第二の立場から取り組んで見たいと念願している。つまり先人の築き上げた伝統教学の意味を問うことによつて、一見無味乾燥とも思える教理理論に対して、俄かに熱い血潮を感じるようになるのではないか。文脈の背後に潜む先人の目指した境地こそ我々の指向するところではないのか。俗な表現を用いれば、じずら（字面？）を追うな、言葉尻に惑わされず、意味を探れということであろう。自己のうちに伝統教学を再構築していく努力過程が教師としての基本的課題であると考えている。

ところで自己の生き方を問う場合に、越えなければならぬハードルがある。それはアラカンは何故アラカンに止どまったのか、そしてボサツは何故出現するのか、菩薩を菩薩たらしめる要因は何か、そして真言行人とは、この問題を自分に問う必要がある。

さて以上のように伝統教学を「自己の生き方としての教学」と位置付けるなら、その知的関心は課題を実践的に解決していく方向をたどり、問題に現実的に対応していく模索へと展開するにちがいない。ここが社会との接点となり、教化および実践的方法論として教化活動のノウハウが重要な問題として浮かび上がるであろう。

既に我々は教化研究所のあゆみの中で、研究姿勢として、各自が以上のような営みを通じて現実を直視した研究、現場の声を反映した問題提起をしなければ、十二分に教化活動に展開し、実践されていかないことを経験してきた。言い換えれば、その場限りとも言える、個別的な問題を普遍化していく上で、情報の収集、分析に基づく当面の回答案、そして将来への方向づけ等の研究活動、それを実地検証していく現場（執筆者もまた現場を預かる一教師である）とのタイ・アップが総合的に期待されるのである。

さて筆者の所属する教化研究室は智山伝法院の一部門として、その役割を次のように共通理解している。これまで

の教化研究所の成果と経験をふまえ、特に「教化とは何か」を基本的、共通の研究課題として取り組むこと。さらに研究、事業への取り組みに当たっては、問題提起という意味で、デスク・ワークによる課題別研究、また教化活動の現状を踏まえた研究会の開催などによる相互研さんを研究室事業の柱とすること、さらに本庁委託事業として編集、広報、また講習部門の一部を担当して、研究課題を事業に反映させつつ、進めていくこと等である。

以上の経緯のもとに教化とは何か、どう考えるかについて、これが当面の課題であるので、私見についてご批判を仰ぎたい。

一、「つくしあい運動」が引き起こしたもの

昭和四十四年、「つくしあい運動」が提唱され、時代に対応した教化伝道の宗団体勢が整うかに見えた。しかし、この画期的な冒険は歓迎されなかった。「つくしあい運動」は不発におわり、かろうじて現今、「つくしあいの理念」に面影をとどめるに過ぎず、今やそれさえも記憶の彼方になり、死語にさえなりかねない。

一体何が「つくしあい運動」を立ち往生させたのか、その原因はどこにあったのか。

この「つくしあいの運動」の提唱は宗団体質を問う試金石となり、我々に多大の課題があることを示した。そればかりか我々真言宗智山派の問題にとどまらず、伝統教団が抱えている諸問題を白日の下にさらしたとさえ言えるのではないか。

どのように時代をとらえ、社会にかかわるのか、その対応はどうあるべきか。我々自身、社会の一員として担うべきものがあるのか。これらの疑問に対して、我々は取り組んでみたことはあるのだろうか、その過程で、宗祖のお考えは我々の心の支えとなり、時代の中で生きているのか。また宗団は社会に方向性を与えているであろうか。

「つくしあい運動」提唱者の率直な問題提起は、今なお我々に問い掛けている。『智山教化研究』の初期の事務報告には生々しく、情熱的に語りかけてくるものを感じる。

しかし、教化研究所は「つくしあい運動」の産みの苦しみも消えないうちに、発育不良で病の子を抱えた身にも等しく「つくしあい運動」は進展しなかった、そして久しい。

一体「つくしあい運動」とは我々にとって何なのか、筆者自身の理解の為に発足当時を振り返っておきたい。

これからの寺院の在り方を目指して、モデルの一として、「僧俗一体による教化運動―僧伽運動―」が提案され、「つくしあい運動」と命名された。

「つくしあい運動」が提唱された背景には、当時の新興宗教の勢力拡大に対する危機感、またそれに呼応した形での、伝統教団による信仰運動の高まりなど外部要因が大きな影響を与えたものと思われる。「つくしあい運動」を推進する上で、寺院の現況を把握することが課題となった。早くも、昭和四十四年度アンケート調査、そして五〇年度動態調査を契機として調査は制度化され、以後五年毎に、五十五年度および六〇年度総合調査として実施された。これら三回の調査は宗団の現状が閉塞状況にあることを示した。たとえ、宗団が「真言密教の深旨を伝え、済生利人の聖業を教化の主体とする」△智山派宗法第一章第五条▽と宣言しているとしても、十五年間を見渡した分析研究は宗団が末期的症状であると診断し、最大の危機を訴えている。

個々の教師一人一人の問題であるばかりでなく、そのような体質を温存してきた当局、また形式を追い、無気力な教師育成機関、そして時代を超越し、社会に閉鎖的で、独尊的な伝統教学にこそ大きな問題が潜んでいると思われる。

二、宗団の現状、特に総合調査の分析研究結果をふまえて

宗団の教化活動という観点からの諸問題については既に『智山教化研究』No. 19 に報告されている。それに基づいて問題点の概略を述べておきたい。

(一) 伝統的行事と教化活動は低調であり、衰退気味である。その原因として寺院の経済的基盤の弱さと兼務寺院の存在が考えられること。寺院の経済的基盤の強弱の問題は教化活動推進に大きな影響力をもっていることが分かった。それは教師の意識のちがいにも波及する重大な問題である。

(二) 伝統的行事が中心となっている教化活動の姿勢に問題はないであろうか。教化の視点はそれだけであろうか。教化の視点をどこにおくか、言い換えれば、それは「つくしあい運動」について、洗い直しを迫る問題でもある。教化について根底から考えてみなければならない課題である。

(三) それは子弟教育の見直し、教師研修の再検討を迫り、教化活動という目的意識をもった教師の育成を目指す必要がある(D. 43)などであり、言い換えれば、これからの宗団を担っていく教師像を明らかにすることが、今、問われていることに外ならない。

また宗団レベルの問題としては、子弟養成に立ちほだかる問題として、世襲性、僧階制度、子弟教育の形式主義など根幹にかかわる問題があり、さらにはダンカ制度、肉食妻帯などの伝統教団が不問にしてきたままの問題、そして寺院婦人の位置付けなども関連しておこる問題である。これらの内部的な諸問題にさえ教学はどんな姿勢を示したか。

(四) 次に教師の意識面を見ると、「僧侶として最も力を注いでいるもの」として、「寺院荘厳と境内整備」が最も高く、「布教伝道」は四位である。また「社会問題への取り組み」については、取り組むべきと思う教師が六〇％存

在し、思わない教師が五％であり、態度を保留した教師が三〇％存在すると言う。この数値について、「自らの寺院の護持と檀信徒との接触という保守的な立場に立ちつつも社会的な問題にも無関心でいられないという逡巡の表明であろう」と教師の姿勢の曖昧さが指摘されている（那須。p. 90）。さらにこの二項目をクロスして、「僧侶の本分は修法・修行という内面へ向かつての精進であると考えているものは、いきおい自らの「外」の問題であるようにおもわれる社会問題に対する関心も薄いということであろう」（那須。p. 91）という指摘は、教師の修行の在り方に疑問を示している。教師研修の再検討の必要性が端的に示唆されている。さらにこの点を寺院婦人の意識から裏付ければ、「（寺院婦人は）高年においては、寺院経営が高率を占めてくる。五十代、六十代において特に高いことは、寺院経営の現場にいる責任ある寺院婦人の意識をあらわしたものといえよう」（磯山。p. 155）。このような意識を寺院婦人に植え付けているのは、最も身近な教師であり、寺院運営の視点である。

社会の問題に対して関心が薄いという姿勢に問題は残らないであろうか。何故、社会の問題に目を向けずに寺院運営がなりたつて行くのであろうか。ここに教化をどう考えるか、大きな分岐点があると思われる。

形式的には、伝統的行事は祖先崇拜にかかわる行事が上位を占める。それは寺院の経済的基盤を支える有力な活動でもある。檀家数の問題でもあり、よってこの寺院と檀家を結ぶ絆を強めればこそ、陋習、因習など弊害を必要悪とせざるをえないという筋書きができあがる。当然、祖先よりの家柄、つまり血筋が問題になり、今を苦悩する人には関心が薄くなる。直接的な祖先、父母の恩は説かれても、衆生の恩、三宝の恩には目が開かない。国民的課題とされる同和の問題にしても、宗団の動きは別にして、教学上の回答は今後である。

葬儀、追善回向の意義を十分に認めるにしても、このままでよいのか、という自問自答は起こるであろう。

社会の問題に対する関心を離れて、教化活動という以上、自分の立場を主張する必要があるであろう。莊嚴な境内に立つ

ただで、参拝者に厳肅な感動を与えることも自己主張の一事例である。そして厳かに執行される儀礼は法悦を生み、心に残るものを与えるであろう。この感動を永続させ、腹で納得させることができれば、そこに教化活動の意味もあるのではないか。その裏付け作業として、直接的に相手に訴え、立場を理解してもらおう方法として、口頭、文書による自己主張がより有効で、重視されなければならないであろう。感情面と思考面との二面作戦が望ましいと考える。

これについて「独自の文書伝道」を実践している寺院が一三％にすぎない現状は教師の資質、それを生み出した研修内容にかかわることである。企業においては宣伝、広告が製品の売上に果たしている役割が大きいことは言うまでもない。この理屈でいえば、我々には、(今更改めて)宣伝するものが無いのか、(既に決まっていることだから)宣伝する必要が無いのか、あるいは(経済的に)宣伝する余裕が無いのか、足元を見直すべきである。

以上を要約すれば、我々自身によって立つ存立基盤から洗い直しが迫られていると言つてよいであろう。これらの難問については既に『智山教化研究』で各方面から論じられているので参照された。

今は、このような荒海に漂う一教師として、筆者自身の方向付けの為に、教化とは何か、どう考えるかについて、私見をまとめておきたい。ご指導をお願いしたい。

三、教化とは何か、どう考えるか

ここで教化とは何かを考察する上で、先人の識見を紹介し、次いで筆者の理解を報告してみよう。

(一) 始めに故渡辺照宏先生は、「智山教化研究所のあり方」にふれて次のよう言われる。(『智山教化研究』No. 1, p. 23 ~)

まず、「教化の内容をはっきりつかんでいなければ、とうてい相手を納得させることはできない」と、「教化する

人の側」の問題があること。そのための必要な研究の柱として、「歴史と教理と実際との三部門」をあげる。「歴史の部門においては近代的な史学研究方法をまず身につけねばならぬ。」「教理の面においては直接に原典にあたって正確な知識を得ることが必要である。」

実際部門については「歴史と教理とに通じた者が更に自己の宗教的生活を発現して他人にその恩恵をあたえることである」と言われる。宗教的発現を現実に展開する方策として、キリスト教団などの活動形態を例に、「活動の活発な団体は『学習』を重要視し、それによって位づけもし、……」と、教師の学習を問題にしなければならぬと戒められている。この提言が公刊されてからすでに一〇数年が経過している。宗教的生活をどのように発見し、具体化するかは、教育体系そのものにかかわる問題であり、この事が今我々に問われていると言える。

(二) 故梶芳光運先生は「つくしあい運動」の基本的な理解、姿勢として次のように言われる。(『智山教化研究』No.7, p.2～)

「僧伽という以上、それは出家者と在家者とを一丸としたものである。したがって相互に尽くしあうということも、当然出家者と在家者との関係を意味してくる。いや、むしろ僧伽にとってはそれが最も重大な関心事なのである。そしてそれは教化を意味してくる(してくる、ミスプリ?)のであるが、……」「大乘仏教は、……その経典が在家者の教化に焦点が向けられている。その場合、出家者と在家者との間には、それぞれの指標とする価値に対して全く相反する立場にあり、その矛盾を超越して、いかにして出家者の説く価値の世界へ転向せしめ、ともにその世界に向かい、そしてそれを実現するかに教化の意義があった。」

初期大乘の出現の経過から、出家者、在家者との関係に必然的に教化が介在する点を指摘されている。その目標も明らかである。「出家者の説く価値の世界へ転向せしめ」こそ我々の基本的立場であろう。生き方の問題でも有り得

る。自己の中にこの価値観を備えていくことが我々の生き方になるのであろう。

しかし今日の我々は出家者といえるかどうか、もし出家者とすれば、現状でよいのか、観念的でなく答えを出さなければならぬ、出家者の自覚を作るのだと言えばその方法論が示されるべきである。さらにこれ以外の道を用意することも考慮されなければならない大問題である。

(三) 吉田宏哲大正大学教授(智山教化資料)第六集『教化ガイドブック』昭和四十九年)は教化についての特集で次のように言われる。

「教化学とは実はこの宗教的価値の教育学である」「教化学の客観的基礎は、宗教的価値にはかならないが、それでは教化学の主観的基礎あるいは心理学的基礎はいかに規定せられるであろうか。ここにいう主観的基礎とは、宗教的価値が個人の内面においていかに芽生え、かつ成長し開花していくかについての宗教心理学的考察である」。これの「素材を提供するものは『大日経』住心品あるいは大師の『十住心論』とすることが出来るであろう。」と教化の筋道とその裏付けを明示されている。『大日経』住心品の重要性は理解できるが、しかしそれでは具縁品以下をどう考えるのか、『大日経』の全体像、その目ざす世界から考えてみたい。

「教化活動の本質とは、まず成仏ということの主體的な性格の側面からいえば、教化の客体たる衆生の主體的な自覚こそが、最初にして最後の目的である」。そこでこの自覚をうながす働き掛けとして、「教化活動のあり方は、教化の客体の全人格、全体験のぎりぎりのところまで降りていき、いわば自己の全存在を無にして、他の飛躍を見とどげなければならぬのである」「飛躍とは……量的な知識の積み重ね、……宗教的情操のかもしれない。……道徳的行為の積み重ねでもない、全人格の根底、靈的な魂の源底から超出する……」。相手の人格の根源的転回を促すことを目標とされている。

(四) 岡田昌道師（「智山教化資料」第六集『教化ガイドブック』教化の内容）は実践的視点から、「教化は他にたいする働きかけが一方的なものではなく、絶えず教師自身の信と相手の信との関わりにおいて、自他が心品転昇していくその作業をいう。教化は教師自信（ミスプリ、身）の信の確かめでもあるのである。」。筆者はこの簡潔でしかも、教化を大上段に振り上げない姿勢に心を引かれるのであり、この立場をこえるものでない。

以上のポイントを要約すれば、基礎的学習、それに導かれた（出家者の）価値観、さらにそれを内面化し生活化していくこと、その道中で、それが対人関係において実践され、自己の内に蓄えられ、成長していく筋道を教化と呼んでよいのではないか。心品転昇はまさに教化活動の実践において実現していくといえる。教化活動の積み重ねの中で、今まで見えなかった自分が見えてくるのである。教化活動は外見上は他者に関わるものでありながらその内実は自己をさらけ出し、自己の不透明さ（未熟さ）に目を開かせるものといえる。

それでは現実の我々はどうか。既に得度式によって形式的にも、意識的にも、仏教界・真言宗智山派の一員となり、教師として所定の行位を履修し、即身成仏を終生の目標、課題として進んでいる（ように見える）が、いかなるものであろうか。

一見して分かり切ったことのようにあるが、ここに何か重要な視点が欠けていないであらうか。危惧するのである。その時、「教化とは何か」が浮かんでくるであらう。同時に、何故、教化活動をするのか、その答えも用意されるであらう。その為には既に述べたように伝統教学をふまえてその体系を自覚的に構築していくことが課題であらう。筆者は教学の体系的理解について、次のように三段階を想定している。

I まず、学ぶ段階。基本的構想。

思想(教相)―実習・体得(事相)―生活化(寺院生活)―実践(教化活動)―社会参加(寺院の存在理由)↑社会の問題。

思想から社会参加までをひくくめて教学の体系と考えるのである。従来は思想と実習との事教二相は車輪として、これが教学と理解されていたが、ここに実践段階の問題を持ち込まなければ、社会の問題に対して動く術を知らないであろう。つまり教育課程に現代の諸問題をカリキュラム化する必要が差し迫っているのである。図面とすれば、これは設計図であり、白描図である。

Ⅱ 現場で実行の段階。一教師としての課題。

上記の設計図にそった実践段階である。それは現実とのぶつかり稽古とも言える。方法論の問題も出てくる。社会を見る目は、思想(教相)に対して疑問を生じ、研究の必要も生じる。その問題解決にも迫られる。こうして筋の通った、その環境に応じて設計図にそった模型が出来上がる、応用である。白描図が彩色される。

Ⅲ 生活に生きる段階。

設計図から模型が試作され、実物が出来上がる。生活はより深い、味わいのあるものになり、思想は新しい意義付けをされる。それは個人の段階から社会化される。

このような枠組みの中で、Ⅰ、Ⅱの段階が繰り返されてⅢが形成されることは予想されるところである。次に実際には今の枠組みの中で、自己の課題である△即身成仏▽を考えてみなければならぬであろう。

一般的には教師という立場は「成正覚」あるいは「成仏道」の試運転であり、「転迷開悟」という自己をつきつめていく道中である。それは先人の識見を借りれば、「宗教生活の発現」であり、「宗教的価値観を身に備えること」である。したがって当面は「自己の内面に向かう方向」を主に話を進めたい。その後「他者とのかわり」を考察し

なければならぬであらう。

我々の目指す△即身成仏▽の世界は、法身・大日如来に直入することである。既にこの世界は大日如来を離れて有り得ず、それは概ね四種の様相で目の前に形を顕しており、その有り様はみずみずしい生活を具現している。しかもこれは固定した写真の一コマではなく、映像のように絶えず流動している。この大いなる流れの中にいかに身を投じるか、いかに自己のありかを定めるか、それが問題である。

このような思想を枠組みに、自己の生き方をどのように構想するかは大問題である。時代、社会にに応じて、その在り方は変化する可能性がある。それは仏教史を省みれば、問題提起、方向付け、実践手段をめぐって検討され、解釈されて、ついには新思想として、宗派として多彩であった。またそこに時代、社会の意識の反映を読むことも可能であらう。

そこでどこが現実に対応していないか。既に注意したように、ラカンと菩薩との違いが別れ目である。社会との接点の問題になる。一には自己の問題として前述のⅠの段階で、事相の問題である。二はⅡの段階で、教相と実践のせめぎあい問題があると考えている。

Ⅰの段階の問題。筆者は事相については二重の理解が出来るのではないかと考えている。その一は事相とはいわゆる三昧、観法を根幹とする実習である。真言行者は観法によって一気に大日如来の世界に参入する。そして、自身は如来であると実感して、歓喜を得る。それを腹で分かる為に知的学習が必要である。知的情報には伝統的な三昧、観法を裏付ける大日経などの世界像があり、もう一方には既に与えられた自身の現状認識である。実習と知的情報との、二面的取り組みを繰り返し修練することによって実感が内実化し、人間が出来上がっていくのではないか。常に如来を実感出来る真言行人は次のより大きな世界に目を開くであらう。

その二としては、日常そのものが法身・大日如来と把握されるべきであること。事相とは我々の生の根源そのもの、さながらの世界を示す言葉でもあると考えられる。それは、観法、修法で得た歓喜が対人、対社会に還元されている姿でもあると考えておきたい。

ここに教化活動への展開がみられるが、それは歓喜の発露という意味で、自然発生的なものである。したがって、自己を明確化し、他者（の思想）を退けて、より向上させて行く根拠が必要である。ここでは自己の生活課題や社会の問題への関心が避けられず、その根拠形成に重要な鍵となる。ここに生きた教学が求められる必然性がある。

さて今述べたことは必然的にⅡの段階で教相と現実の責めぎあいという問題でもある。教化活動を推進する過程で突き当たる諸問題に教相はいかに答えるか、それは現実と遊離しては意味を持たない。ここで現実とは自己の問題に他ならない。生活課題をどう解決しようとしていくのか、それぞれが考えなければならない問題である。ここで最大の問題は、いかに目を開くかである。それは教師の存在基盤に関連してくる。もし寺院経営を視点とすれば、すくなくとも現実の社会の問題には答えられないであろう。総合調査の分析研究によれば、社会の問題に関心が薄いと言う指摘は教学の危機的状况を示している。そこで教化を視点にすえた教学体系を構想しなければならないのではないか。その一事例として「つくしあい運動」を再研究すべきではないか。教化イコール現実対応と急いではならない。現実を素直に直視する目を養うことが先決である。問題のありかを見抜く目が重要である。すでに我々は慣習、因習の中にどっぷりと浸っている。この盲点に迫らない限り教化活動屋で終わるであろう。

四、まとめにかえて

何故教化活動をするのか、またしなければならぬのか、この素朴な疑問を考える必要はある。この点が明白に

なれば、その展開施策も大綱が定まると言えよう。

始めに制度的な問題から言えば、△真言宗智山派宗法第二章第九条▽には、「本宗の教化は、全宗門人がこれを行わなければならない」と規定している。従って形式上はこの条文に支配されて、教化活動を実践すると答えればよいであろう。しかしこのような、受動的な姿勢から前述の、教化の本質を自己実現とする内面的な営みにたいして、答えが用意され、問題が解決されるであろうか。あるいは宗団はこれらの期待に応えられる教育体勢を整備しているであろうか。

総合調査の分析研究が指摘する問題点に焦点をあてて、多種多様に検討課題を提示してきた。基本的には繰り返しることになるが、教化とは自己を見詰める目であり、問題の所在を見究める目でもある。歴史を省みれば、積尊に始まり、弘法大師や興教大師に学ぶところは多々ある。何を問題にされたのか、そこに今を生きる我々教師の研修の課題がある。